
放課後の教室

律花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後の教室

【Nコード】

N8834W

【作者名】

律花

【あらすじ】

勉強はできるけれど、ちょっと冷めたところのある中学二年生の植本駿。ある日、放課後の教室で、偶然同じクラスの三森早希と会う。おとなしい彼女の「家に帰りたくない」という言葉が気になり、次第に存在を意識するようになるが……

1 いつもの光景

「おまえ、ほんと食うの遅いなあ。もつとぱっぱと食えないわけ？」
西村がいつものように、三森にちよつかいを出す。だけど、三森はなんの反応も示さない。視線さえ上げずに、のろのろと弁当のおかずを食べている。

班のほかのメンバーはとくに昼食を終えて、違う班のやつのところへ遊びに行ってしまった。

女ってことを差し引いても、三森はほんとうに食べるのが遅い。一口ひとくちがすくなくて、その上味わうみたいにゆっくりと咀嚼するから、なかなか弁当箱の中身が減らない。

西村が三森の食べ方をからかって、おかしそうに笑っている。席替えでいまの班になってから、すっかりおなじみの光景。三森が毎度口をつぐんだきり、なにも言い返さないから、西村はますます図に乗るんだろう。

僕は机に頬杖をついて、そんなふたりを横目に見ていた。

ちよつとは言い返せばいいのに、って頭の片隅で思う。けど同時に、そういうことができないやつもいるってことは、ぼんやりとだけと理解している。

小学校のころから、クラスにひとりはいた。おとなしくて、なにを言われても黙ってうつむいているだけで、なんとなくこいつは馬鹿にしてもいい、みたいな雰囲気ができ上がっているやつ。

このクラスでは、三森がそういうポジションってことなんだろう。実際、西村と同じような、テンションが高くて頭の軽い男子に、よくからかわれている。

三森がやっと、弁当を全部食べ終わった。それとほとんど同時に、昼食時間の終わりを告げるチャイムが鳴って、クラスメイトはばらばらに自分の班へ戻っていった。

終礼が終わると、教室が一気に騒がしくなる。授業が全部終わった開放感のせいか、みんな昼休みの数割増しくらいの勢いで友達としゃべり出す。うしろの席の海斗に背中をつつかれて、僕は後ろを振り返った。

「なあなあ、塾の英語の宿題ってもうやった？」

「やった。っていうか、英語って今日じゃん。まだやってないわけ？」

別にめずらしくもないことだけど、ちょっと呆れてみせる。すると、机の上のスクールバッグに両腕を預けながら、

「午後の授業中、やるつもりだったのに寝ちゃってさあ」

梶谷の授業眠すぎ、子守唄たるあれ、と海斗がだるそうにぼやく。もう、この先にくる台詞は想像がついている。

「ってわけでさ、またノート見せてよ。帰り、ジューズおごるし」

やっぱり、案の定だ。僕ははいはい、と適当に声を返して立ち上がった。それからスクールバッグを肩にかける。教科書やノートの大半は机の中に残しているから、全然重くない。

「いいけど、とりあえず帰ろうよ。ノート家だし」

「さすが、前から思ってたけど駿っていいやつ」

調子のいいことを言いながら、海斗がぴょんと席を立つ。

それを確認して、僕はドアのほうに足を向けた。

2 帰り道

二車線の車道沿いに伸びる歩道を歩く。学校の先生の悪口とか、クラスのやつから聞いたうわさとかを、海斗と話しながら。

「そっぴや、聞いた？ 佐藤が山本に告ったつてよ」

「ほんとに？ で、どうだったの？」

「瞬殺、だつて。だよな！。佐藤も最初っから期待してなかっただろっし」

半分あきれて、半分同情しているような笑いを浮かべて、海斗が言う。

確かに、妥当な結果だつて思う。かわいくて話も面白い山本と、地味で動作のとろい佐藤じゃ、どう考えても釣り合わない。

「けど、なーんかくじけるよな。おれも告りたいけど、どうせふられんだろうな」

急に海斗が落ち込んだ表情になって、深いため息をついた。

「神谷のこと？」

「そうそう。神谷つて正直、すげえかわいいし。うわーおれ、明らか不釣り合いじゃね？」

海斗はひとりで話を完結させると、「あー」だか「うー」だか分からない声を上げて嘆いた。それから、いきなり僕に話題を振ってくる。

「駿は相変わらず、好きなやつとかいないわけ？」

「いないよ、そんなの」

隠しているわけじゃなくて、ほんとうにいなかった。

女ってなんか陰険なやつが多いし、変なところで怒ったりわめいたりするからややこしいし、わざわざ付き合いたいなんてまったく思わない。だから、「クラスの女子で、彼女にするなら誰がいいか」なんてくだらない話題で盛り上げられるクラスメイトの気持ちも、ぜ

んぜん分らない。

クリーニング屋の脇にある自販機で、僕たちは缶コーラを二本買った。もちろん、僕の分は海斗のおごりだ。

プルタブを引いて、中身を一気に半分くらい飲み干す。夏休みが開けて間もなく、まだまだ空気に暑さの名残がある時期。身体に冷たさが行き渡ってゆく感じが気持ちいい。

「本気で、女に興味ないわけ？ うそ言ってねえ？」

そう言って、海斗がほとんど空になった缶を軽く振る。中でコーラのはねる音がした。

「ないっての。っていうか、うちの姉ちゃんと一日いっしょにいたら、女とか絶対無理って感じになるから」

「おまえの姉ちゃん、そんなひどいのかよ」

うんひどいよ、と笑いながら、姉ちゃんのことを脚色も込みで話す。

それを聞いて、海斗はおかしそうに笑い転げていた。

海斗と別れて住宅地を進み、家に着く。いつもどおり、スクールバッグから空になった弁当箱を取り出そうとして、僕は思わず舌打ちをした。

学校に、弁当箱を置き忘れてしまったらしい。

僕は大きいため息をついて、手ぶらで外に出た。そして、ついさっき通った道を、ふたたびたどり始めた。

3 放課後の教室

正門を抜けて校庭を突っ切り、僕は校舎に入った。

下駄箱でスニーカーをはきかえて、二階につづく階段をのぼる。みんな部活に行ったか帰宅したみたいで、誰ともすれ違わない。ざりざりと、上履きがコンクリを擦る音だけがひびく。

ドアを開け、教室に足を踏み入れる。

そのまま自分の席に向かおうとしたとき、窓際に立つうしろ姿が目に入って、僕は立ち止まった。

三森だ。

三森がゆつくりと、こつちを振り返る。そして、まるで僕の存在が本物かつて確かめるみたいに、数回まばたきをする。

しばらく視線がぶつかって、先にそらしたのは僕のほうだった。

自分の席に向かい、机のフックにかかった弁当袋を取る。

「弁当箱、忘れちゃって」

無言で立ち去るのも微妙だから、ついでのように声をかけた。

三森がはっとしたように、弁当袋を持つ僕の手元を見る。すこし視線を落とし、どこかぼうつとした様子でつぶやく。

「……そうなんだ」

「三森はなにしてたの？　こんなところで」

僕の何気ない問いかけに、細い肩が怯えたようにはねた。そして、かすかに唇が動く。この場にふさわしい言葉を探しそこねたように口をつぐんで、それからやっと、消えてしまいそうな声で答えた。

「なにも、してない」

正直、すぐく反応に困る返答だった。話題を膨らますことさえできやしない。まあ、三森にはそもそも会話をつづける気がないのかもしれないけど。

なにそれ、と愛想笑いを浮かべて、僕はきびすを返した。これ以

上、この気まずい空気に堪えられそうになかった。

ドアの引き手に手をのばしたそのとき、独り言のような声が耳に届いた。

「帰りたくなかったの」

思わず、僕は三森のほうを振り返った。三森が伏し目がちに、もう一度繰り返す。

「家に帰りたくなくて……だから、残ってたの」

言葉の内容とは裏腹に、その表情は悲しそうでもさみしそうでもなかった。なんの感情も浮かんでいないように、僕には見えた。

僕は話し方を忘れたみたいに、ただその場に立ち尽くしていた。

三森のすぐうしろの窓は開け放たれていて、そこから流れ込む風が、肩下まである髪を揺らしていた。

4 家庭の事情？

塾に向かつて、自転車をこぐ。ペダルを踏みながら、頭に浮かぶのはなぜか、窓辺にたたずむ三森の姿だった。

自転車置き場に自転車を止めて、玄関ドアを開ける。すれ違った講師にあいさつして、夕方から開放されている自習室に入った。先にきて最後列に座っていた海斗が、僕に気づいて片手を振ってくる。「駿、ノートノートっ」

僕が隣に腰を下ろすやいなや、海斗がそう催促してくる。わかつてるよ、とかばんから英語のノートを出し、海斗に渡した。

「待ってる間に片付けときゃいいのに」

僕のつぶやきに、海斗がへへっと笑う。

「駿の解答のほうが確実じゃん。駿、超頭いいし」

まあ、そう言われて悪い気はしない。ちなみにこう見えて、海斗もそこそこ勉強ができるんだけど。

海斗がシャーペンを手にも、ノートを写しはじめる。その様子を眺めているうち、またさっきの出来事が頭をかすめた。三森が、ぽつりと洩らした言葉。

家に帰りたくないって、なんでだろう。親とけんかでもしてるんだろうか。

「なあ、さっき偶然、三森と会ったんだけどさ」

海斗がシャーペンを動かしたまま、つづきを促す。

「そんで？」

「家に帰りたくないとか言ってたんだけど、なんでだと思う？」

僕がそつたずねると、海斗はがくつと大げさに机の上に突っ伏した。すぐにむくりと起き上がって、声を上げる。

「んなこと知るかつ。親とけんかでもしたんじゃない？ それか、かてーのじじょー的な理由」

家庭の事情。

たぶん適当に言ったんだろうけど、その言葉にはなんだかリアリティがある気がした。

「三森ってなんか、わけありっぽくね？ 親に暴力振るわれてるとか、普通にありそうじゃん」

いつもおどおどしていて、ほとんど声を発しない三森は、僕たちとは異質な人間のように思えることがある。単におとなしいだけじゃなくて……まどつている雰囲気が違うっていうんだろうか。つかみどころのない感覚を、うまく言葉にできない。

ただ、海斗も僕と同じ印象をいだいていて、だから「わけありっぽい」なんて言い回しをしたんだってことは分かる。

「なに？ 三森のこと、気になるわけ？」

海斗がにやにやしながら言う。

「別に。なんとなく聞いてみただけ」

そっけなく返して、僕は腕時計を確認した。角張った数字は六時半を示していた。

三森は、もう家に帰ったんだろうか。

別に心配しているわけでも、あるのか分からない「家庭の事情」に首を突っ込みたいわけでもないけど、ほんのすこしだけ、心に引っかった。

5 曇り空の夕暮れ

「駿、ちよつとスーパーで、卵と豆腐買ってきてくれない？」

日曜日、ソファに寝転がって漫画を読んでいたら、台所から母さんの声が飛んできた。

「えー……自分で行きやいいのに」

「手が離せないのよ。今日の夕飯、なくてもいいの？」

そんなことを言われたら、行くしかない。

母さんからかばんを受け取って、僕はしぶしぶ家を出た。

いまにも雨の降り出しそうな空の下、財布と折りたたみ傘の入ったかばんを手に、駅前のスーパーへ向かう。だるいなあ、と心の中でばやきながら。

スーパーに着いた僕は、陳列棚の間をぶらぶらと歩いて、頼まれていたものをプラスチックかごに入れていった。ついでにと、自分用のお菓子をその中に忍ばせてやつたりもした。

そうして、買い物が終わらせて、レジへ向かう途中。

調味料が並ぶ棚の前に、僕は私服姿の三森を見つけた。

棚の前にしゃがみこんでいた三森は、小瓶をひとつ手に取ると、かごに入れて立ち上がった。それから歩き出そうとして、やっと僕に気づいたらしく、動かしかけていた足を止めた。

「買い物？」

いい話題が見つからなくて、なんだか当たり前な質問をしてしまう。三森はおずおずとうなずいて、植本くんも？ と聞き返してくる。うん、と僕が答えたのを最後に、会話が止まった。こんな状況、前にもなかったっけ？ 確か以前教室で会ったとき。

もう三森も買い物が終わったみたいだった。ここで別行動するのも変だし、自然とふたり揃ってレジに向かうことになる。

会計を済ませて商品を袋に詰め、僕たちはスーパーの外に出た。

墨をにじませたみたいな空は、かろうじて持ちこたえてくれていた。歩道をたどる僕の数歩うしろを、三森がついてくる。僕との距離をはかりかねているような、そんな感じ。帰る方向が同じなんだろうけど、ちよつと気まずい。

「それ、重くない？」

振り返り、三森の持っているビニール袋を目で示して、僕はたずねた。いっぱいになった袋は、二リットルの飲料が入っていたりして、かなり重さがありそうだった。

「あつ……ううん、全然、大丈夫」

ふるふると、三森が何度もかぶりを振る。

そこまで必死に否定しなくても、とぼんやり思う。大きな袋は小柄な身体に不釣り合いで、あきらかに手に余っているように見えるんだけど。おまけにもう片一方の手も、水色の傘でふさがっている。「持つよ」

なにも持っていない右手を、僕は差し出した。

「いつ、いいよ……いつも自分で持つてるから、慣れてるし……」

「そんないつも、ひとりで買い物してるわけ？」

気になってたずねると、三森は恥ずかしそうにうつむいて、肩を縮めた。

「うち、親がふたりとも働いてて、忙しいから……よく、私が買い物してるの」

そばを通る車の走行音に紛れて、小さく、ほんとう小さくつぶやかれた声に、僕は海斗との会話を思い出していた。

かてーのじじょーってやつ？

でも、親が共働きしてるやつなんて、友達にもたくさんいるし。別にめずらしい話でもない。

「とにかく、慣れてても重いものは重いだろつ。貸せよ」

僕は強引に、三森の持っている袋を奪い取った。三森は驚いたように目を見開いて、なにか言おうとして……ぎゅつと唇を噛んだ。

「……ありがとう」

その声はかすかに震えていて、薄い影の落ちた顔は、いまにも泣き出しそうに見えた。

6 気になる存在

スーパーで会って以来、なんとなく三森のことが気になるようになった。西村にからかわれているところを見ても、以前ならなんとも思わなかったのに、最近はいよいよ海斗としゃべっているふりをしながら、耳をそばだててしまう。

ある日、社会科のグループ発表に向けて、班ごとにリーダーを決める機会があった。まあ、そんなものは当然誰もやりたがらないわけ、みんなでお互いの反応をうかがう状態になってしまった。

「三森でいいんじゃない？ どうせ、リーダーとかやったことねえだろ？」

西村が笑いながら言ったのは、そんなときだった。

班全員の目が、三森のほうを向いた。どう考えても、三森は場を取り仕切ったり、大勢の前で発表をしたりするには向いていない。みんな分かっていながら、口を挟まなかった。ただ、顔を見合わせ、苦笑いするだけ。

なにか言って、自分に白羽の矢が立つのがいやだったからだ。

三森はじつとつむいていた。自分には意見する資格なんてないって、思っているみたいだった。

「おれがやるよ」

いてもたってもいられない気分になって、僕は名乗りを挙げた。

リーダーなんて面倒なこと、やりたくなかったはずなのに。なんで自分から率先して飛び込んでしまったのか、分からない。

場はそれでスムーズにまとまった。みんながほっとしたような笑顔で、僕に感謝してくる中、三森だけが相変わらず黙り込んでいた。とても申し訳なさそうに目を伏せて、まるで痛みをこらえるみたい。

月末になると席替えがあつて、三森とはすこし席が離れてしまった。でも、教室の後方にある新しい席からは、教室全体を見通すことができた。教室の中程の席にいる三森のことを、僕は授業中や休み時間、ふとした瞬間に見ていた。

三森は基本的にいつもひとりだったけれど、たまに山本とか柏木とか、クラスでも特別ひとなつっこいやつに話しかけられていた。

三森が誰かとしゃべっているところを目にするたび、僕はもどかしさに近い感覚をいだいていた。

なにを話してるんだろう？

耳を澄ませても距離が邪魔して、三森の小さな声は聞き取れない。ここから見えるのはうしろ姿だけで、顔さえ分からない。

笑っているんだろうか。それとも、緊張して、こわばった表情をしているんだろうか。

想像してみたところで、それを知るすべなんて、僕は持ち合わせていなかった。早希ちゃん、って親しげに話しかけることのできるあの女子よりも、僕と三森の距離は遠かった。

「駿、なにぼーつとしてんだよ。帰ろうぜ」

海斗の声に促されて、僕は教室のドアに向かった。

途中で一度、自分の席を振り返る。すこし迷ったあと、なにも気づかなかつたふりをして、ふたたび足を進めた。

7 ふたたび教室で

家に着いた僕は、適当な頃合いを見計らってまた家を出た。車道沿いの道を進んで、学校に着く。

校舎に入って階段をのぼり、教室のドアを開ける。

どれくらいの期待をかけていたのか、自分でも分からない。ただ、はつきりしているのは、三森があの日と同じ、誰もいない教室の窓辺にたたずんでいたことだった。

三森が振り返る。こっちを見つめる目が、とまどいに揺れている。僕はゆっくり自分の席に向かうと、机の横にかかった弁当袋を手にとった。

「また、弁当忘れた」

そう言って苦笑いすると、不安げだった三森の表情がゆるんだ気がした。

「三森は、今日も残ってたんだ」

「……うん」

「家に帰りたくなくて？」

今度は息を殺したような沈黙が返ってくる。

三森の様子をうかがったあと、僕は思い切って、ずっと気になっていたことをたずねた。

「三森ってさあ、親と仲悪いの？」

三森が小さく息を飲む。そして、僕からぎこちなく目をそらして、弱々しい口調で答えた。

「そんなこと……ないよ。けんかとかも、全然しないし」

相変わらず口数がすくなくて、ひとを拒絶するような態度を見せる三森。

僕は言うべき言葉を失って、黙り込んだ。分からなくなっていた。

わざわざ、忘れ物したふりなんかして、僕はなにをしたかったんだろう。

窓の外から聞こえてくる運動部のかけ声が、場違いな感じで耳にひびく。この前の放課後よりも涼しい風が、三森の髪をなびかせる。ふいに三森がこつちに視線を戻し、そしてやっと、「質問への回答」じゃない言葉を僕に向けた。

「ずっと言えなかったけど……この間ありがとう。リーダー、やってくれて」

「いいよ、あんなの。っていうか西村のあれ、あきらかに嫌がらせじゃん」

先日のリーダー決めの際の出来事を思い出して、あきれながら言う。

すると、三森はなににも言わずにうつむいてしまった。あまり触れられたくないことだったのかもしれない。やつちやっただかな、とちよつと後悔する。

「まあ、適当に聞き流しとけばいいよ。あんなのに付き合ってたら、時間の無駄だし」

くだらない、って一笑するように、僕はそう言った。

「ん……そうなのかな」

三森が小さく首をかしげて、自分に言い聞かせるみたいにつぶやく。

こんなときにふさわしいのがどんな表情なのか、僕には分からない。ただ、ここでいかにもって感じのまじめな顔をするのは、なんだか違う気がして。

「そうそう。別に三森が悪いことしたわけじゃないんだしさ」

だから僕は、適当っぽくて、軽い感じの笑みをつくった。それが三森の目に、どう映ったのかは分からないけれど。

「……うん」

三森がこくんと小さくうなずく。

それから、その唇がかすかに動いて、だけど、やっぱり声にはな

らなくて

代わりに大粒の涙が、白い頬を伝い落ちた。

8 孤独とさみしさ

あ、と三森が小さく声を洩らす。自分が泣いていることに気づいて、自分でも驚いたっていうふうに。

三森はあわてて目元に手をやった。ぼろぼろとこぼれる涙を、強引にぬぐう。

僕はなにがなんだか分からなくて、ただ黙ってその様子を見ていた。張り詰めていた糸が切れたみたいで、そんな泣き方だと思って思った。

「なんで」

やつのことで、僕はのどから声を絞り出した。

「なんで、泣くんだよ」

「……分かんない」

そう答えて、三森は顔を上げた。もう涙は止まっていたけれど、こすった目の下が赤くなっていた。

「あのね、私……ほんとは、買い物なんか行きたくない。晩ご飯だつて、つくりたくない。三人分つくっても、食べるときはいつもひとりで……誰も食べてくれてなくて、朝、そのまま残ってることもあって」

堰を切ったみたいに三森が言う。また泣き出しそうになるのを、ぎりぎりのところで踏みとどまっている感じで。

「ひとりで家にいるのが、怖い。お父さんもお母さんも、いつも帰りが遅くて……私のこと、忘れちゃったんじゃないかって思っちゃって、すごく怖い」

さっきまで泣いていたせいで、すこし鼻にかかった声。まだ目じりもちよつと濡れている。

正直、僕には三森の気持ちがよく分からなかった。買い物なんてせいぜい、母さんに頼まれたときに嫌々行くくらいだし、晩ご飯を

自分でつくったことだって一度もないし。ひとりでいる怖さなんてものも、全然感じたことがない。

だから、その場しのぎな慰めの言葉はかけなくなかった。それはまるで、上っ面だけのきれいごとを押し付けるおとなみたいで、ひどく偽善者っぽく思えた。

「事情は、知らないけど」

三森がはっと、僕の顔を見る。窓の外、三森のうしろに広がる空はまだ明るいけれど、教室に差し込む光は昼間と違って、ほんのすこし橙色を帯びている。

「ここにいたって、なにも変わらなくなる？」

今度は、返事がない。それが答えだっていうように口をつぐんでから、三森はひとりごとみたいに言った。

「私……ときどき、自分がどこにいればいいか、分からなくなる」

ひと呼吸ぶんの間のあと、言葉を継ぐ。

「どこにいても、不安になるの。ここから私がいなくなっても、誰も気にしないんじゃないかって」

そのとき、教室のドアが派手な音を立てて開いた。体操服姿の西村が中に入ってきて、僕と三森の姿を認めるなり、大げさな声を上げる。

「うわっ、植本と三森じゃん」

そして大股で教室の後方にあるロッカーに向かい、ペットボトルホルダーを手に取った。

「ごめんごめん、邪魔したかなー」

にやにや笑いながら、品定めするような目を僕たちに向ける西村。その目つきが不快で、僕は思わず西村を睨みつけた。西村は素知らぬふりできびすを返して、教室を出ていった。

ドアの向こうに消える西村の背中を見届けてから、三森に視線を戻す。

呆然とドアのほうを見つめる三森の目には、はつきりと怯えの色が浮かんでいた。

静けさばかり際立つ教室で、僕はじつと三森の言葉を待った。
だけど、三森はその日、最後まで口を閉ざしたままだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8834w/>

放課後の教室

2011年10月8日03時21分発行